

## 論文の和文要旨

論文題目

現代ウズベキスタンの社会変容と教育

(ふりがな)

マシフラホン・トフタミルザエヴァ

氏名

Mashkhurakhon Tukhtamirzaeva

### 問題の所在

ソ連の解体によって独立を果たした他の旧ソ連諸国と同様に、ウズベキスタンにおいても国が大きく変化しつつある。政治・経済体制の変化とともに、社会構造も大きく変わっている。人々の価値観やライフスタイルの変化は当然ながら、彼らの教育についての考え方にも影響が出ており、人々の生活のなかで教育の占める位置も同様に変わりつつある。

ウズベキスタンは人口の約 52% (2010) が 25 歳未満の若者からなっている。労働力不足への不安はないという意味で、国のこれからが期待される。一方で、その若者をどう教育し、どのように働き手として育成するかによって、国の将来が左右されるので、政府もさまざまな人材育成に向けての教育改革を実施してきた。とくに、国の将来を担う人材として社会に出て行き、経済発展のために貢献できる優秀な若者を育成するために、教育段階のなかでも後期中等教育に力を入れた政策をとってきた。

他方、近代化の波が世界のどの国にも影響しているように、ウズベキスタンの社会も経済発展とともにグローバル化によって大きく変わってきている。当然このことは人々のニーズやライフスタイルにも反映されている。

また、ウズベキスタンは約 8 割以上の人口がイスラームを信仰している国である。しかし、歴史的にみると、宗教、伝統、文化の面で多くの衝撃的な変動を経験しながら、現在の独特な社会が形成されたといえよう。

上記のことを踏まえ、本研究では、ウズベキスタンの社会変容および教育の状況を過去から現代まで連続させて、ソ連解体後のウズベキスタンの社会変容と人々のもつ教育意識との間の関係を明らかにしながら、教育改革で生じた教育上の諸問題との関係について、その原因と相互関係を解明し、今後の教育改革の方向性を提示することを目的としている。

## 各章の内容

まず第1章では、独立以前の主としてソ連時代の社会と教育を取り上げた。ここでは、まず初めに、イスラームの社会主義体制への対応を検討した。ソ連による人為的国境画定以前、ウズベキスタンはイスラームをアイデンティティとして共有する地域であった。しかし、ソ連時代、人々を社会主義体制に包摂するため、イスラームは民族的アイデンティティの象徴として弾圧を受けることになった。そのようななかでイスラームという根強いアイデンティティを持ち続ける人と、体制との調和を図るため、信仰に関してはイスラームを形式的な受容にとどめた人とがでてくることになった。

他方、教育については、近代的教育制度の導入が図られた。つまり、教育は、科学的無神論の立場から、宗教や伝統からは切り離され、社会主義的なイデオロギーを人々に植えつけるとともに、近代的な要素を導入したのである。また、ソ連時代を通じた教育改革の後期の段階では、職業資格の取得に重点が置かれるようになった。

つぎの第2章では、独立後のウズベキスタンの社会変容について検討した。まず、ソ連解体後の独立の過程に注目し、ウズベキスタンが選択した漸進的な経済改革により、他の中央アジア諸国に比べ、経済的混乱を小規模にとどめたことに注目した。また、イスラームが弾圧から解放されて、復興の道を歩むことになったが、ソ連時代以前のときよりも、信仰の受容については多様化していったことを述べた。さらに、経済的かつ社会的なグローバル化は教育面にも多大な影響を及ぼしている現状についても指摘し、教育制度の実態に対する質的評価や人材育成の結果としての社会的受け皿の充実などが、今後の課題となっていることについても言及した。

第3章では、独立後の政府の教育改革を取り上げ、その詳細な経過を分析しながら、教育改革の目的を明らかにすると同時に、人々の新たな教育制度へのアクセスや教育機会の地域間格差を検討することによって、教育改革の成果と問題点を抽出した。その結果、独立後の教育改革によって、後期中等教育では、男女の就学率がともに伸び、さらに、男女間のジェンダー格差が縮小していることがわかった。他方、高等教育に関しては、男女ともに就学率が当初は上昇していたが、2000年代半ば頃から低下傾向に転じ、しかも女性に不利な形で男女間のジェンダー格差も拡大しているという現状が明らかになった。したがって、独立後のウズベキスタンの教育改革は、後期中等教育ではそれへのアクセスという点では成功を収め、高等教育ではその成果が限定されていることが明確になった。また、首都タシュケント市とその他の地域との後期中等教育に関する比較分析を通して、農村地域における教育環境の整備や職業カレッジの多様性を補充すること、さらには、都市部と農村部で就学機会にかなりの不平等があることも判明した。

このような問題点を抱える教育改革について、政府側がどのような見方を持って教育改革を推進してきたのだろうか。第4章では、この点について検討した。具体的には、政府が発行する新聞『教育』の記事を通して、就学前教育から高等教育に至るまでの各教育段階において、政府が認識している教育改革の課題と問題点を取り上げ、政府がそれらに対してどのような対応をおこなっているかを明らかにした。とくに、後期中等教育では、卒業生の雇用先の確保が重点的に取り上げられており、それが喫緊の課題となっていることが分かった。また、それに対して、政府は様々な雇用対策を実施したり、起業を促進したりして、後期中等教育卒業生に対する雇用の確保に取り組んでいることが明らかになった。では、このような現状と課題を抱える独立後の教育改革のなかで、人々は教育に対してどのような考え方をもっているのだろうか。

こうした質問に応えるために、筆者は現地調査を実施した。第5章では、その現地調査の分析を行っている。首都、地方中心都市、農村部の3地域を選定し、インタビューを行った。そして、教育問題の背景となる各種の要素を9つのカテゴリーに分けて分析し検討した。その結果、人々は、より豊かな生活や人生を実現するためのものとして、教育に期待をしていることがわかった。また、女性に関しては、伝統的なウズベキスタンの社会や家族のなかで、自分の地位を築けるようにするために、教育を求めるケースがあることも明らかになった。しかし、後期中等教育を義務教育化し、無償化することで、すべての人に後期中等教育を提供することを狙った教育改革であったが、一方では、伝統的な社会や家族生活を守るなかで、人々は教育を諦めざるを得ない状況に追い込まれることもしばしばあり、また他方で、教育が必ずしも成功に結びつくわけではないことを実感している人も数多くいることがわかった。

## 結論と今後の課題

本論文のまとめとして、教育に関する5つの課題を提示した。まず第一に、教育制度の問題点、とくに後期中等教育の制度と実態のギャップを指摘した。第二に、教育内容と社会の要求との間にズレが生じていることを明らかにした。深刻な問題として（解決が急がれるものとしては）、ミスマッチ。第三として、教師の世界での能力主義や地域的な質の差が存在することを指摘した。第四に、親たちの教育意識について、著しい地域格差が存在し、これは伝統的な背景も影響していると判断した。しかし、ジェンダーに関しては、意外なことに、女性優位の考えを持つ親の教育観が存在した。第五に、子供たちの教育意欲については、いずれも積極的な姿勢が見受けられ、親の期待に応える姿勢が明確であった。しかし、卒業後の雇用の保証については、政府も苦慮するほどの大きな問題となっている。

つぎに、教育に影響を及ぼす文化的な背景について、4つの概念を取り上げて考察した。一つめは地域差である。現地調査を行った3つの地域間には、特徴的な差があることを確認し、その背景にある問題点を指摘した。二つめは世代差である。家族の役割分担のなかで、親の責任感は極めて強く、子供の通過儀礼や教育に対しての大きな負担も辞さない。一方、子供たちは親の期待に応えるとともに、家庭のなかで自分たちの役割もしっかりと行っていることが明らかになった。三つめはイスラームについてである。独立によってイスラームは復興したが、その受容については、地域間、世代間で差があることが確認された。たとえば、ソ連時代を経験した親の世代では、伝統行事の継承意識があっても、信仰に関しては厳格とはいえない面がある。他方、子供の世代では親の代わりになってまでも、礼拝や断食といった信仰規範を守る現象がみられる。四つめはジェンダー問題である。教育におけるジェンダー問題は、一概に男性優位と論じられない現状がある。一方で、伝統色の強い地域では、女性の幸福像として、家庭中心に考える意識も存在している。

本研究を総括して、ウズベキスタンの教育や社会的背景において、地域的な特徴やジェンダー意識の面では新たな発見をすることができた。将来の課題としては、伝統的なアイデンティティを維持しつつ、国際的に通用する自立的人間形成を行うことが、ウズベキスタンの教育の本質的な使命であるということを提言した。